

非暴力平和隊・日本(NPJ) ニュースレター

第73号

2019年11月27日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 1階 A 室
スペース御茶ノ水気付 非暴力平和隊・日本

Tel: 080-6747-4157 E-mail: office@np-japan.org

Website: <http://np-japan.org/>

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

- ・【巻頭言】ナルピ（東北アジア地域平和構築インスティテュート／NARPI）

2019年度夏季トレーニング報告：—南京にて考え、感じたこと—
理事 奥本 京子 2

- ・「ぼけますから、よろしくお願いします。」理事・事務局長 安藤博 7

- ・NP 2018年活動報告 要約 理事 大橋 祐治 9

- ・「地方から〈いわき平和のつどい〉に参加して」 監事 鞍田 東 13

- ・沖縄報告 共同代表 大畑 豊 15



【ナルピ 2019年夏季トレーニング集合写真】

ナルピ（東北アジア地域平和構築 インスティテュート／NARPI） 2019年度夏季トレーニング報告： —南京にて考え、感じたこと—

理事 奥本京子

東北アジア——われわれが日々生活を営む地域——は、世界のほかの地域と同じように血と汗と涙にまみれている。政治の視点からは、勝手な大義を掲げたリーダーたちが政権維持や私利私欲に奔走している。21世紀になってほとんど20年も経とうというのに、拡張主義や家父長的な発想から脱するどころか、それらはますます肥大していく。経済の視点からも、勝者の論理でものごとが進んでいく。消費することそれ自体がいかに暴力であるかを問わないままに、若者世代に課題のすべてを一方向的に押し付けて逃げ切ろうとする大人世代が幅を利かせている（きっと私もその一人）。軍事についても、冷戦期さながらの軍拡競争は一向に収束する気配を見せないどころか、露骨にチキンゲームの様相を呈している。

東北アジアの平和創造を目指すトレーニングを提供するナルピ（Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute）にとっての今年の夏季の舞台は、南京であった。平和構築トレーニングを2011年度から本格的に開始したナルピは、既に一度、2014年度夏季に、南京での運営を経験している。5年経った今年の夏、トレーニングの合間に見えた様々な風景

に思いを馳せてみたい。なお、プログラム全体の詳細については、ナルピから発行しているニュースレターを参照いただきたい（www.narpi.net）。

ところで、2014年といえば、

・4月16日、フェリーセウォル号が済州島に向かう航行中に沈没、多くの若者を含む300人以上の命が失われた。

・日本では、7月1日、集団的自衛権の行使を容認する憲法解釈の変更を閣議決定した。

・9月には、香港の行政長官選挙をめぐる、何十万人のデモ参加者が北京の介入に抗議した。

そして、2019年には、

・3月31日、香港にて逃亡犯条例改正案に抗議する大規模デモの開始、9月4日に行政長官が正式に撤回してもなお、若者を中心とした多くの市民による未解決課題の要求、対する警察権力の暴力的介入、また一部過激化する抵抗運動、との悪循環がまだ予断を許さない。

・日本では、4月に明仁が天皇を退位、5月に徳仁が天皇に即位、10月に新天皇の即位礼正殿の儀、「天皇陛下万歳」といった声が無批判に鳴り響く。

・7月23日、竹島／独島付近の領空を侵犯したロシア軍機に対し、韓国空軍の戦闘機が警告射撃を行う。

・日韓関係においては、「徴用工問題」や戦時性暴力をめぐる歴史的課題に根を張る問題の数々が、この間ずっと顕現して

いる。

これらは「トップニュース」的扱いを受ける出来事であろう。このほかに、ニュースにすらならない（扱われることの少ない）辺野古米軍基地、ヘイトスピーチ、難民、技能実習生、子どもの貧困などのさまざまな社会的課題が、われわれを取り巻いている。

東北アジアにおいてこのような憂うべき現象が継続的に見られる中、2019年度ナルピのトレーニングには、20代から60代の95人の東北アジア人を中心とした参加者が集った。プログラムの真ん中に設定しているフィールドトリップの間には、スタッフも合計すれば115人といった大所帯であった。全体で13日（到着から別れまで加えると15日）の間、いつものように友情と信頼構築、そして平和創造の技術・態度獲得のために、トレーニングやフィールドトリップを通じて、また食事や休憩時間において、相互理解・交流を行った。

ただ、今年のナルピにおいては、一つ特殊な事情があった。上記95人の参加者のうち、58人がC9（シーナイン）と呼ばれる中国のトップ9大学の学生としての参加であったことである。中国では、毎年、C9の学生のために各大学が独自にサマースクールを開催するのだそうである。南京大学においても今年もそれを開催するはずであったが、できればナルピの企画に合流させてくれないかと依頼

を受けたのであった。ナルピとしては、南京大学を会場としていろいろと便宜を図ってもらっていることもあるし、中国の若い世代としっかりと交流する絶好の機会でもあるということで、快くお受けした。ただし、上記の参加者数であるから、出身地域・国のバランスがうまく取れず、その点は運営上の大きな課題であった。

トレーニングの内容については、レギュラーコース（1. 紛争と平和のフレームワーク、2. 平和教育の理論と実践、3. 歴史的加害のための修復的正義、4. 世代間トラウマに終止符を打つ）に加え、新しいコース（5. 平和構築への多様なアプローチ、6. トレーナーズトレーニング、7. 平和構築のための空間とファシリティ：アート・教育・展示、8. 共同体を基盤とした紛争転換）も開設した。いつもは各週3つずつのコースを用意するが、今年は大人数に対応するために4つずつのコースを用意した。

また、フィールドトリップでは、中国では非常に珍しい民間の反戦ミュージアム（中国語では民間抗日戦争博物館）、2015年12月に開館した「慰安所」ミュージアム（南京利濟巷慰安所旧跡陳列所）、南京大虐殺祈念館（侵華日軍南京大屠殺遭難同胞紀念館）、南京夫子廟界隈、梅園コミュニティセンターを訪れ、過去・現在、そして未来を視野に入れることを学んだ。このうち、南京大虐殺祈念館には2014年度にも訪問している。

日本からの参加者にとっては、南京トレーニングへの参加がもつ意味・期待は、当然のことながら南京大虐殺をめぐる痛みや苦しみに焦点を当てて学ぶことである場合が多いようである。これは、5年前も今年も変わらなかったが、しかし、今年は中国本土の20代の若者が多かったこともあり、少々趣が違ったことは興味深かった。「過去の」「南京の」悲劇についてより、「現在の」「中国」に生きる自分たち（の将来）に関心がある若者、必ずしも南京に縁があるわけではない若者、がその大半であったということだろうか。

もっと言えば、中国本土におけるポリティクスの急激な変化の影響を受けてかどうか、若者世代に大きく何がしかの影を落としているとも感じられたこと、また、「トップエリート」大学生が激しい競争原理を生き抜いて育ってきたことによる世界観のあり方を目の当たりにして、巨大な現代中国のいびつな価値観に対して正直恐怖に近い感情をいだいたことも認めねばならない。中国本土目線から見た「マイノリティ」参加者たちへの対応には、往々にしてそれがはっきりと表れていた。ナルピ運営側としても、どこまでどのように「介入」できるか・すべきかは、大きな課題として突き付けられた。

しかし、その裏腹に、無邪気なまでに好奇心むき出しの彼らの姿を見てみると、新しい関係性・社会性を構築することの希望を見出すこともできる気がした。冒

頭に書いたありさまの東北アジアは、しかし希望にも満ちている、と言えるように努力していきたいと痛切に思った。トレーニングの日々が続く中で、徐々に打ち解けあい、信頼関係が生まれ始めるころ、一部の学生らとは立ち話のレベルでいろいろと自由に語らうことも少しずつ可能になっていったように思う。「公」の場所ではないところでは、ある一定の安心感をもって情報や意見の交換ができる。トレーニングの休憩時間を少し長めに取ったりして、そういった活動を陰ながら応援したつもりである。彼らの知識欲は旺盛で、アニメや小説などの文化面から、日本の帝国主義の歴史的な変容について、また自国の課題についてまでも批判的見解をも持ち、大いに関心を示して嬉々として対話する姿は大変印象的であった。

もちろん、すべての若者がそうであるわけではない。ささやかなナルピの活動のひと夏の交流の中で生まれた友情や信頼感に甘んじるのではなく、また、私自身の中にある構造的暴力も問い直し、脱しきれない文化的暴力を意識化しながら、非暴力に生きることをほんの少しでも実現していきたいと思う。ナルピでは、来年2020年の8月には、トレーニング実践10周年を記念して、ピースボート船上で今後の10年についての計画を立てるための集いを企画している。トレーニングの提供はせずに、今までナルピの経験を共に築いてきた仲間たちと一緒に、東北アジアの平和に真摯に向き合い語り合うことになるだろう。



非暴力平和隊・日本の皆さんには、最初の段階からずっと支援いただき、ナルピー一同深く感謝しています。いつもありがとうございます。これからもどうぞお見守り下さり、時にはご参加下さいますよう、よろしく願いいたします。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 2019年 トレーニングの数コマ



NARPI

(東北アジア地域平和構築インスティテュート)

東北アジアは歴史、領土、軍事、核の問題を通じて緊張した関係にある地域です。現在、人的、財的資源は東北アジアの国々の軍事化に費やされています。敵意と軍事優先の文化を平和と和解の文化に変革するには、教育と根本的なパラダイム転換が必要です。

しかし人々に変革を起こすためのスキル、知識や資源を与える教育やトレーニングの機会が欠如しているのが現状です。NARPI(ナルピ)は平和構築トレーニングを提供し、多文化間のネットワークを構築することによって東北アジア地域の人々を強化することを目的としています。平和構築トレーニングによって、東北アジア出身の参加者は、平和構築、紛争転換、修復的正義や調停などのトレーニングを受けることができます。このようなトレーニングを通して、アジアの様々な地域出身の人々が関係を構築し、紛争や文化の違いを転換するアプローチを実践していきます。紛争転換や平和構築分野のトレーニングはこの地域にとって不可欠です。平和構築分野で活動する学生や活動家の要求に応える形で、NARPI(ナルピ)のアイディアが生まれました。

NARPI(ナルピ)は、東北アジアの協力団体からなる運営委員会によって運営されており、この地域の人々にトレーニングを提供します。東北アジア地域平和構築インスティテュートのビジョンは東北アジア地域が活発な非暴力、相互協力、持続的な平和の地域となることです。

NARPI(ナルピ)のミッションは平和構築トレーニングを提供し、東北アジア地域の人々をつなげ力づけることによって、軍事的な文化や構造、恐怖や暴力に溢れたコミュニティーを、平和で公正なものに転換することです。※NARPI(ナルピ)トレーニングの主要な使用言語は英語ですが、英語力は、日本の大学生レベルの理解があれば参加可能です。多少の日本語サポートも提供しています。



Partner Organizations

- * Korea Peacebuilding Institute
- * PeaceBoat
- * Peace in China
- * Transcend Japan
- * Nonviolent Peaceforce Japan
- * Peace Missions Center
- * Blue Banner

「ぼけますから、よろしくお願
い
します。」

理事・事務局長 安藤 博

「わたくし、認知症になりました。もうこれからはお勉強会に出ることなどできませんから、よろしくお願います」—自宅近くのカトリック教会で毎月一回行っている勉強会の部屋に入ろうとしたところで、メンバーの女性から丁寧なご挨拶を受けました。「なにをおっしゃいます、こうしてちゃんとお話しになってるじゃありませんか」「いいえ、お医者さまからはっきりそう告げられました。間もなく、何も分からなくなります」。

自分とほぼ同年齢、勉強会ではしっかりした発言をされ、国会周辺の護憲集会などによく参加される、沖縄の辺野古座り込みにもご一緒したことのある方です。突然の「ぼけます」通告にいささかうろたえ、第40代米国大統領のロナルド・レーガン氏(1911/2/6—2004/6/5)が亡くなる10年前の1994/11/5に「国民にあてた手紙」のかたちでアルツハイマー病告白を行ったことなどを思いながら、「こちらと同じようなことですよ」と、意味のないご挨拶を返しました。

全くの偶然ですが、それから間もなくの日たまたまのお誘いを受けて東京・東中野のポレポレ館で本稿のタイトルと同じ映画を観ました。広島県呉市の老夫妻「母、87歳、認知症。父、95歳、初めての家事」のごくふつうの日々を、ひとり

娘の信友直子さんが「泣きながら撮った1200日の記録」です。その日はこの映画のアンコール上映の最終日で、監督/撮影/語りを務めた信友直子さんが、終映後に映画制作の経緯、反響、そしてご両親の現況などを話されました。91歳のお母さんは認知症が進むとともに食事(嚥下)が困難になり施設に入って胃瘻で生命を保っている。99歳のお父さんは、腰が曲がり耳は遠くなっているものの、元気で一人暮らし。毎日のように歩いて30分の妻のもとに通っている—。



たんたんとした日常の記録であるだけに、どこの誰にもやってくる「老い」

がすさまじい迫力で迫ってきて、「ああ自分も『よろしく』を言わねばならない」と思い入りました。

それというのも、安倍首相が打ち壊すことに執念を燃やす憲法9条を守る活動の担い手の高齢化が、覆いようもない現実となっているからです。〈9条の会〉などの集まりでいつもため息まじりに言われているのは、「若い人がいない」、「若い人は『安倍さんの方が分かりやすい』と言う」。憲法を変えようというのが革新的で、翻ってわたしたち「9条を守ろう」は古い、守旧派とみなされるのではないかと。

「ぼけますから」の映画を観ながら、「若いひと」との間のギャップをどう埋めるかが喫緊のこととして迫りました。国会周辺の集会、沖縄・辺野古の座り込み等でご一緒する方たちは、皆さん、お元気です。それだけに問題です。「ぼけます」の告知して身を退くならまだいい。しかしぼけて行きながら、「酔ってねえぞ」をわめく酔っぱらいのようにぼけを自覚できず、周りの空気が読めずに「俺たちの若いころは」の長広舌をふるう元気なぼけ老人が問題です。若者を9条から遠ざけてしまいかねないからです。他ならぬ自分がそうなのではないか。

この先20年この世にはばかり続けることはあり得ないという厳然たる事実をわきまえ、「ぼけます」どころか「もう十分ぼけているのではないかと、こころしなければならぬ。そんな自分が、「若

い人たち」とともに9条を守る活動に当たり、戦争を放棄する憲法9条を「よろしくお願いします」と引き継ぐためには、次のようなことを自らの戒めとしなければなりません。

なにより、くどく長い話しはしない。特に「60年安保のころは、もっと若い者が表に出てきたもんだ」というような説教めいたことは言わない。

「若いひと」は、生まれてみたら世界で4、5番目の軍事費を使う自衛隊があつて、だから戦争をして敗れ「戦争はしない」と誓ったと9条誕生の来歴を語るだけでなく、GDPではるかに日本を追い越した中国が軍事増強を続けている現況に対して、9条がどの活かせるかを、できるだけ分かりやすく伝えねばならない。

以上を確認のうえ、特に若い方々に申し上げます、「わたくしぼけますから、憲法9条を守り活かすこと、よろしく申し上げます」

NP 2018 年活動報告 要約

理事 大橋祐治

NP の 2018 年活動報告 (Annual Report) が NP ウェブサイトに掲載されましたのでその要約をご報告します。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

毎日、メディアで世界各地の紛争や暴力、或いは軍拡競争が報告され平和が遠ざかり、非暴力平和隊 NP の存在が忘れがちですが、2018 年の NP 活動報告は、にもかかわらず、勇気と希望を与えるものです。活動資金は前年比 2 割増加しました。政情が安定したフィリピン（ミンダナオ）は現状維持ですが（スタッフ・資金）、南スーダンではスタッフが前年の 165 名から 190 名に増員されました。NP 創設者の一人で尚、第一線で活躍しているメル・ダンカン南スーダンを視察した印象として、5 年間で希望を見出しつつあると述べています。中東では NP スタッフは大幅減少していますが活動資金の比率は維持されています。

女性の活躍が目立っています。活動報告では女性の活動に関する記事や写真が多く掲載されています。NP が女性のエンパワーメントに力を入れている成果と言えましょう。女性の選挙への参加、投票の恣憑、環境整備（ミャンマー、イラク）をはじめ難民キャンプでの暴力の抑止のための女性保護チームの増加（南スーダ

ン）などにみられます。

フィリピン、ミンダナオでは部族間衝突の抑止や調停に NP は政府や国際監視団に協力して大きな役割を果たしてきました。数字には現されていませんが、バングラデシュのロヒンギャ難民キャンプでも現地パートナーと協力して様々な支援にあたっています。

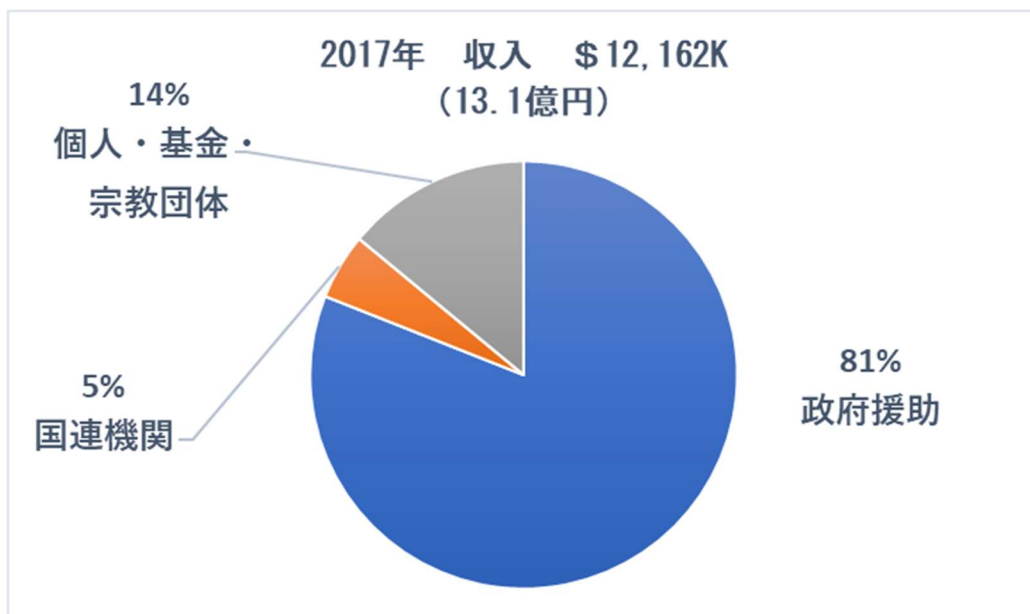
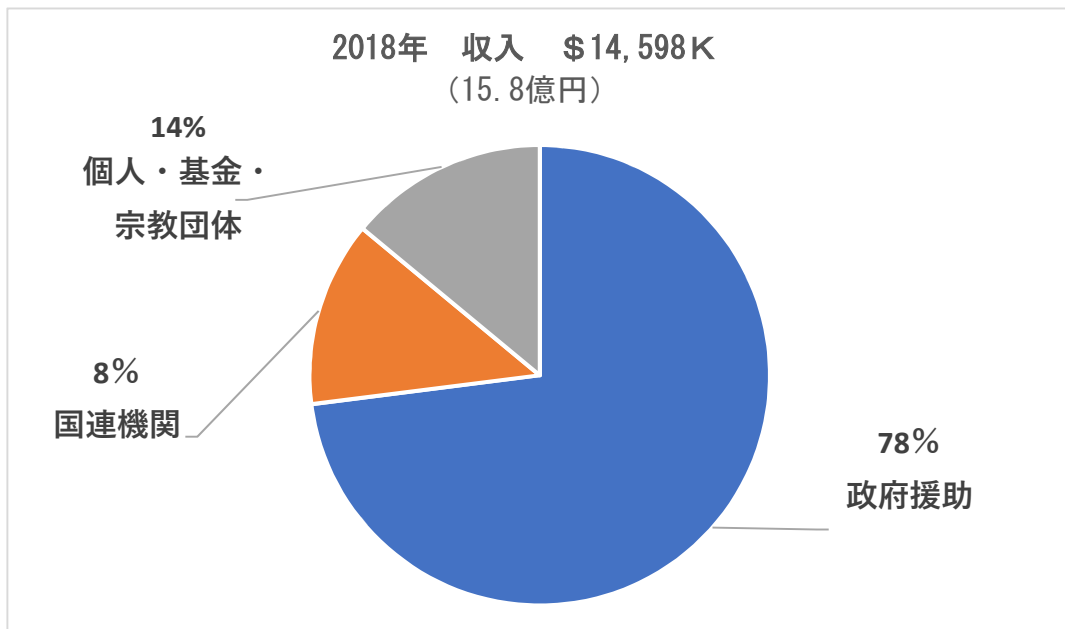
世界の少なくとも 24 の紛争地で UCP (非武装市民平和活動) を行っている 40 数団体の現状の課題の一つは相互の連携の強化、情報や手法の共有、規模の拡大にあります。NP は 2018 年にも 7 月に中東で、11 月にナイロビでこれらの諸団体とのワークショップを主宰しました。また、NP は 6 月 22 日、ルクセンブルク平和賞を受賞しました。この賞は、シェンゲン平和財団および同財団が主催するワールドピースフォーラムより平和に資する活動に対して与えられる国際的な賞です。

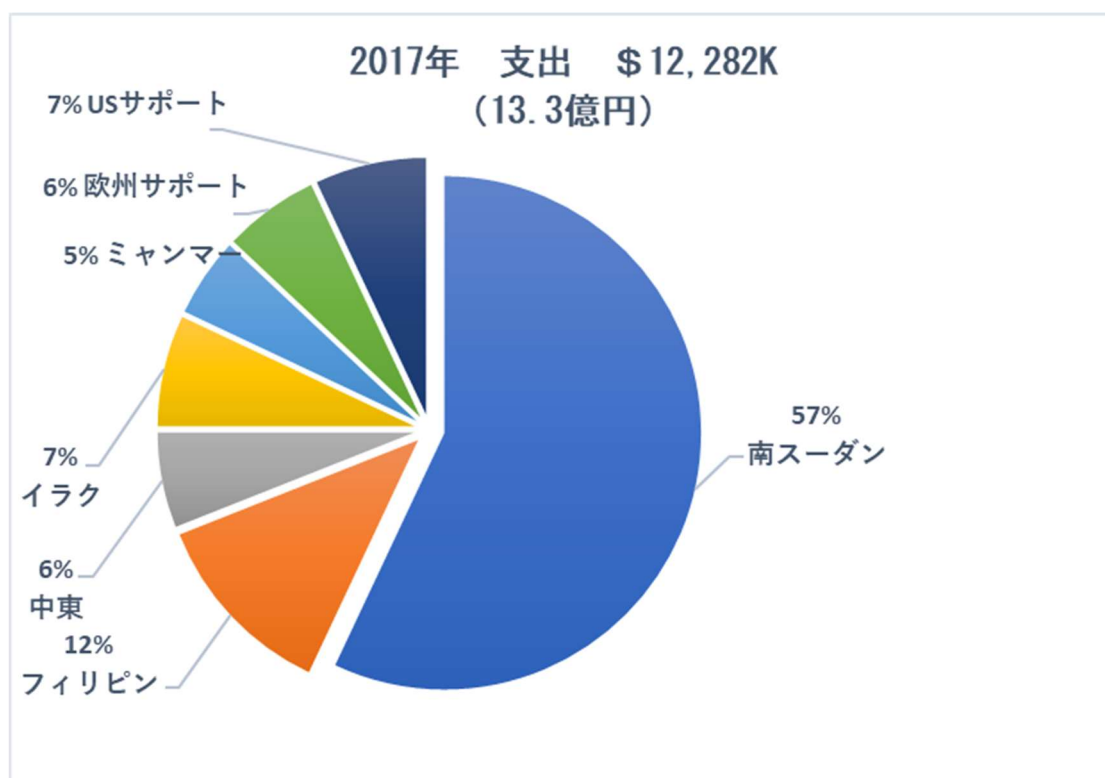
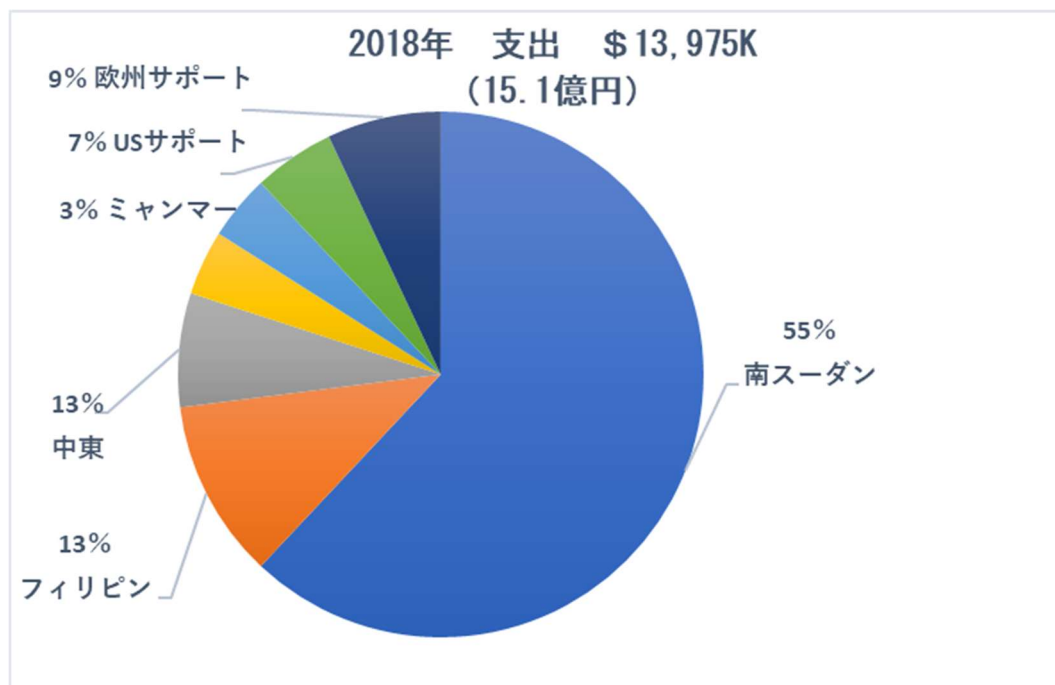
NP の役員、上級スタッフの変動はありませんでした。詳細は NPJ ニュースレター第 70 号 (2019 年 2 月 13 日発行) をご参照ください。NPJ のウェブサイトにも掲載されています。上級スタッフのトップ Tiffany Easthom の誠実、精力的なリーダーシップに心からの敬意を表したいと思います。



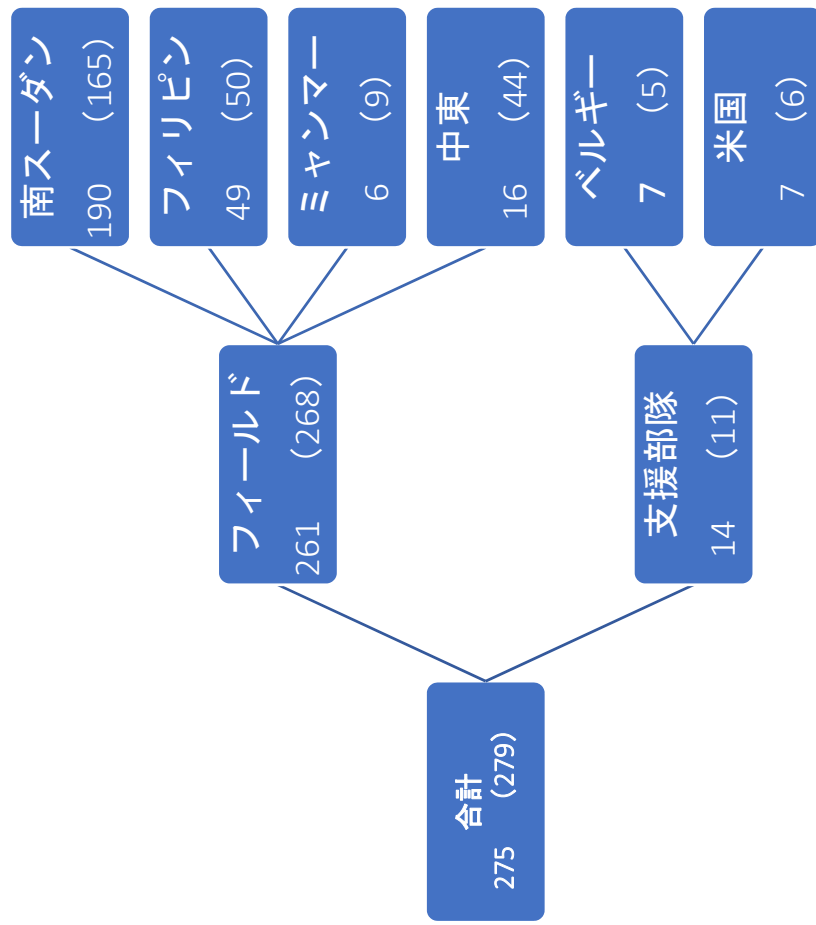
NP 概要報告 収支

換算レート : US 1 = 108 円





NP スタッフ 2018 年末 単位:人 () 内は 2017 年末



国内外スタッフ比率

海外スタッフ 37%

国内スタッフ 63%

男女比率

男子 53%

女子 47%

(2018 年末)

「地方から・・・いわき平和のつどい」に参加して」

監事 鞍田 東

8月25日、〈いわき平和のつどい〉で『沖縄の人たちはどのように闘ってきたのか・・・伊江島の農民の農地取り上げへの抵抗』という展示をしました。

このイベントは 毎年8月 いわき市文化センターを会場に開催されています。御恥ずかしいのですが 他に「非暴力平和隊」という名前をいわき市民の前に提示できる機会がありませんので、声をかけてくださることを幸いに 何か掲示（と掲示物の説明、掲示内容リーフの配布）という形で参加させていただいています。

今年のテーマが「沖縄の歴史と運動から見えてくるもの」であり、大ホールでは「標的の島 風かたか」の上映が企画されていました。そこで

- ・ 現在の辺野古・高江などでの闘争が伊江島での阿波根昌鴻さんたちの〈非暴力〉に徹した粘り強い闘争であること
 - ・ 日本国憲法が適用されない 島民がまったく無権力である軍政下でこれだけの闘争がされたことが〈非武装・非暴力・不服従抵抗による防衛〉の貴重な先例である事
- を認識していただきたいと思い このテーマを取り上げました。

掲示内容は下記のとおりです。

=====

沖縄の人たちはどのように闘ってきたのか

伊江島の農民の農地取り上げへの抵抗

『阿波根さんの抵抗精神』（西日本新聞・2019年7月）

沖縄県名護市辺野古を訪ねた。

工事に反対する人たちの抗議行動は、変わらず続いていた。

戦後の沖縄は抵抗の歴史だった。「銃剣とブルドーザー」と形容される米軍の強制土地接收。住民は米兵の脚にしがみついたり、座り込んだりして止めようとした。伊江島の土地接收反対住民リーダーだった故阿波根昌鴻（あはごんしょうこう）さんは、沖縄本島を歩く「こじき行進」を主導。非暴力を貫く「不服従積極抵抗」は、土地接收の理不尽さを多くの県民に知らしめ、「島ぐるみ闘争」へと発展させた。』

.....

辺野古通信 抜粋 コピー

沖縄 と 伊江島 の 地図

出典「土地と農民 沖縄県伊江島」阿波根昌鴻 1973年 岩波新書

.....

日本復帰以前＝日本国憲法が適用されない米軍の軍政下での 米軍との対決

1945年 米軍占領、6割を軍用地として指定

1947年 住民 伊江島へ帰還

1954年 演習地として立退・農地接收通告／

米軍・琉球政府への陳情、(1)参照

1955年 武装米兵上陸 軍事演習開始／

陳情・座込み、耕作強行

農耕中逮捕5名、軍事裁判、懲役／栄養

失調で子どもを残して死亡

乞食行進（2）参照、金網撤去

1956年 山林30万坪の焼き払い・

立入禁止看板の横に看板（3）参照

1964年 ベトナム戦争、激化

1966年 ミサイル鑄込、座込み、持ち帰り

1970年 軍用地の41%の解放を発表

.....

（1）「陳情規定」1954年11月

『反米的にならないこと・怒ったり悪口を言わないこと（中略）／ウソ偽りは絶対 語らないこと、／会談の時は必ず座ること（中略）／耳より上に手を上げないこと／大きな声を出さず、静かに話す／人道、道徳、宗教に精神と態度折衝し、（中略）／軍を恐れてはならない／人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人に勝っている自覚を堅持し、破壊者である軍人を教導く心構えが大切であること（以下略）』

全地主一同（署名捺印）』

米軍・琉球政府への陳情にあたって、話し合って決めた

.....

（2）乞食行進 1955年7月～1956年2月

「賢明なる全住民の皆様へ 自分の畑を強行に耕作すれば射殺される。泥棒（中略）全家族が生きられる道ではない。乞食（乞食托鉢）、これも自分たちの恥であり、全住民の恥だ。しかし、自分たちの恥より、われわれの家を焼き土地を取り上げ、生活補償をなさず、失業させ、飢えさせ、ついに死ぬに死なれず、（中略）武力によって乞食を強いられているので

あります。（中略）全住民の皆様。御寛容下されんことをお願い申し上げます。

伊江島真謝地区地主」

琉球政府前の陳情小屋で『もう乞食・托鉢するしかない』ということになり、沖縄全島を数人～2・30人でくまなく歩いた

.....

（3）米軍の立入禁止看板の隣に看板

『接收の真相と演習地の悲劇

米軍は契約書も見せないで契約させ、・・・われわれの家を焼き払って大事な土地を奪った。・・・飢餓と病魔・・・逮捕・・・罰金・・・投獄・・・

爆死・・・貫通銃創・・・射殺・・・かかる暴挙は米国合衆国民の不名誉・・・天も地も神も仏も知っている。・・・他国民に与えた不幸は間違いなく自国民の上に帰って来る。われわれはこの苦しい体験・・・米国民の上に不幸の来ることを望まない。

すべて剣をとるものは剣にて滅ぶるなり。（「聖書」マタイ伝）』

建てる・・・撤去される・・・建てる・・・撤去される・・・くりかえしつづけたものの一つ

=====

掲示の場所は 映画を上映する大ホールの入り口前でしたので かなりの方が 立ち寄って下さいました。又、通り過ぎてゆく方にリーフを数十枚お渡ししました。今迄の 非暴力平和隊の活動、非武装・非暴力・不服従防衛の意義などの掲示よりは反応があったように感じました。

沖縄報告

共同代表 大畑豊

またもや落下事故

米軍 CH53E 大型輸送ヘリからプラスチック製の窓が 8 月 27 日沖縄島東側約 8 キロの海上に落下していたことがわかりました。沖縄防衛局から県や基地所在市町村に 29 日に伝えられました。落下事故後も同型機は飛行を続けました。2017 年に同型機からやはり窓や部品が落下した宜野湾市の普天間第二小学校や緑ヶ丘保育園の関係者からは「またか」「犠牲者が出てからでは遅い」との声があがりました。また事故報告も発生してから 2 日後と遅かったことにも批判の声が上がりました。

県によると復帰後の米軍機関連事故のうちヘリコプターの事故は 141 件でそのうち CH53E が 37 件で最も多い。また所属部では海兵隊が 112 件、事故種別では不時着が最も多く次いで部品落下、4 分の 3 が基地外で発生、基地内では普天間飛行場が最も多くなっています。またこの CH53E は 10 月 21 日には鹿児島県種子島空港着陸後、機体の不具合で 3 日間離陸できませんでした。

CH53E は 40 年前に導入され、老朽化しており、後継機の開発も米国防予算の削減などで遅れています。また海兵隊全体の整備態勢の不備も指摘されています。米軍の安全管理意識の低さ、地元軽視と、訓練優先の「軍の論理」が背景にあるとみられています。

今度は伊江島で

嘉手納基地を拠点とする米空軍特殊作戦機から部品が落下していたことがわかりました。落下は 10 月 18 日に起こり、その日に伊江島で見つかったのですが、正確な情報が米軍から提供されたのは 25 日になってからでした。連絡も遅いですし、それまでは落下した部品の形状や重さ、発見場所について不正確であったり、曖昧な情報しか知らされませんでした。落下はタッチ・アンド・ゴー訓練中に起きたとのことで島袋・伊江村長は「米軍は早目に原因を究明してほしい」と求めました。

返還地に着陸

新たなヘリパッド 6 ヶ所が建設され、2016 年 12 月に一部返還された米軍北部訓練場のヘリパッド跡地で米軍ヘリが離発着していることが 9 月 4 日に目撃されました。北部訓練場の約半分が返還され、そのほとんどは 18 年 6 月にやんばる国立公園に編入されました。離発着が目撃された場所も国立公園内でしかも特別保護地区に当たります。県の吉田政策参与は「事前通知なしで不時着したことになり、問題だ」としました。上記落下事故が起きたばかりであり、「あってはならないこと」と県幹部は不快感を表明しました。住民も「米軍は返還しても使っていないと思っているのか」「返還の意味がない」と憤りました。

普天間飛行場所属のヘリが「誤認」して着陸したと米軍はのちに回答しています。

これに対し専門家は、あり得ないミスで「戦場ならば敵地の中に誤って着陸するのと同じで、命取りになる」と指摘します。

返還地 使用か

返還された区域で米軍のものとみられる未使用弾などの発見が相次ぎ、1900 発近くが見つかっています。発見地は世界自然遺産の推薦地に含まれる場所もあります。見つけられた弾丸は機関銃や小銃の弾丸とみられ、その他照明弾や、最近のものともみられる野戦食の容器も見つられています。



【北部訓練場ゲート前で抗議】

北部訓練場の過半が返還され、政府は当時沖縄の基地負担軽減策の成果として式典まで開き宣伝、辺野古移設を推進しようとしたが、土地は戻ってもその上空は米軍が自由に使用できる状態が続いています。今回は陸地でも同じような状況が続いていることが判明しました。また米軍は政府が迅速な連絡を要請したばかりなのに、今回も連絡は2日後でした。また以前はこのような事態に対して

米軍司令官が出向き、陳謝等の対応をしていましたが、最近では出向くどころか、県からの呼び出しにも拒否する対応です。

新基地 耐震性不十分

問題だらけの辺野古新基地建設。今度は耐震性が不十分であることが判明しました。新基地は大規模地震に備えた耐震性能を想定せず、震度4程度の地震しか想定していません。空港の耐震設計に関する国交省の基準は、中規模程度の地震を「レベル1」、東日本大震災級の最大規模の揺れを「レベル2」としています。防衛省の調査報告書では新基地はレベル1を採用。地震加速度（単位：ガル）を最大40ガル（震度4程度）としました。東日本大震災は最大2993ガル、阪神大震災は800ガル。羽田空港など主要13空港はレベル2を採用しています。新基地建設エリアには軟弱地盤のほかに2つの断層があり、専門家は、震度7もありうる、最低でも震度6弱を想定すべきで「弾薬庫もあり特に安全性が求められる」と指摘、県民の安全性も軽視することになります。

大規模地震を想定せずに軟弱地盤の改良工事が可能だとした背景には新基地建設を早期に進めたい政府の思惑が透けて見えます。また米軍側が本当にレベル1でよいとしたならば、新基地は重要施設ではない、と言っているに等しくなります。また大規模地震を想定すれば、工期のみならず、工事費も数倍に膨らみます。当初政府は新基地建設の総事業費を

3500 億円としていましたが県の試算では現在でも 2 兆 6500 億円かかるとされています。県民投票でも 7 割が反対し、たいして重要でもない軍事施設にこれだけの税金を投じるのは愚かとしか言いようがありません。

「技術検討会」

問題だらけの新基地推進のための新たなお墨付き機関「技術検討会」が 9 月 6 日に初会合を開きました。軟弱地盤の改良工事に関する技術的な検討をすることが目的ですが、委員 8 人のうち 4 人は政府ならびに政府系機関で勤務経験があり、中立性が疑問視されています。委員長も旧運輸省出身で埋め立て関連会社役員です。建設ありきの機関ではないかとの指摘に対し防衛省幹部は「建設ありきではいけないのか」と開き直っている始末です。

完成後の沈下懸念

しかしこの会合でも、他空港では見られなかった大浦湾特有の軟弱地盤であることや、軟弱地盤が集中している地点も指摘され、完成後の地盤沈下の懸念を示す意見が出されました。政府は、一般的で実績のある工法で地盤改良が可能と強調してきましたが、難工事になることが浮き彫りになりました。

また技術的には可能でも、使われる大量の砂の調達方法や、工事にかかる時間、費用、濁りなどによる海域生物に与える影響にも県や識者から懸念が出されてい

ます。

鉱業法違反

県内で鉱物を採取・販売するには鉱業法に基づく事業計画書を国に提出する必要があります。販売する資材すべてを記載しないといけませんが、辺野古埋め立て用土砂（岩ズリ）を販売する琉球セメントが提出した計画書には石灰岩のみで岩ズリの記載がないことがわかりました。国会議員らが同社からの購入停止と購入した岩ズリの使用停止を求めました。これに対し防衛局は同社と直接の契約関係がないこと、同法の所管官庁ではないことを理由に回答しませんでした。「発注者である防衛局に全て責任がある」と批判しました。

業者、米軍と直接協議

沖縄防衛局が軟弱地盤の改良工事に関し、設計変更業務を委託している業者に対し、設計に当たって米軍との協議を指示していることが判明しました。土木技師は「委託業者が直接米軍と協議するのは異例」であり、軟弱地盤が米軍にとっても深刻な問題であることがわかるとしています。地盤改良工事に関する「土木基本設計」の資料には「米軍との協議を別途（当初、30%、90%、完成）行うものとする」と指示しており、設計変更の完成までに 4 回米軍と協議することになっています。沖縄国際大の照屋寛之教授は「日本政府の公共事業を米軍に相談することは異常で、それを県民、国民に説明せずに進め

ていたことはさらに問題」と批判しました。

移植サンゴも死滅

新基地建設にからむ辺野古の埋め立て区域から移植した絶滅危惧種のオキナワハマサンゴ9群体のうち3群体が死滅か消滅していることがわかりました。県は工事着工前の移植を求めていましたが、政府はこれを無視して埋め立て工事に着工しました。

全長 515 メートルのK8護岸の建設も250 メートルならサンゴに影響ないとし、移植しないまま今年3月に着工しました。こんな判断にお墨付き与えてきたのが環境監視等委員会です。サンゴの専門家は「1年で9群体のうち3群体が死ぬのはかなり高い確率。明らかな失敗」と指摘します。

「ホープスポット」に認定

暗い話題ばかりの「辺野古」ですが、辺野古・大浦湾一帯が世界的にも重要な海域である「ホープスポット」（希望の海）に認定されるという明るい話題もありました。

「ホープスポット」は米国を拠点とするNGO「ミッション・ブルー」が認定するもので、現在、世界で110ヶ所以上あり、日本では初となります。同NGOは世界的にも著名な海洋学者シルヴィア・アール氏が立ち上げ、辺野古・大浦湾一帯の重要性を強調し、新基地建設に対しては「かけがえのない自然を大事に思う皆さ

んが疑問の声を上げる機会だ」とのメッセージを寄せました。

米軍、本部港使用通告



【米軍トレーラーの前に立つ（本部港）】

海兵隊が伊江島でのパラシュート降下訓練で使用する大型救助用ボートを9月17日、本部港から出港させると9月14日地元紙に報道されました。県によると10日に本部港管理事務所に海兵隊から通告があり、県は2度に渡り使用自粛を要請したが米側は「伊江島での訓練に必要」と応じませんでした。県内民間港の米軍艦船の使用はこれまで与那国、石垣、宮古、伊江島の4港あり、今回使用すれば5港目となりますが、沖縄本島では初めてとなります。

これまでの4港は「乗組員の休養と友好親善」のためとしていましたが、実質は有事に備えた調査が主目的でした。今回は「訓練のため」と目的を伏せることなく伝えてきています。県は住民が不安がるし「一般の船舶が使用するので民間港湾の使用は控えてほしい」と要請していました。



【米軍トレーラーの前でデモ】

阻止行動へ

この報道を見て「あつまれ辺野古」は阻止行動を決めました。一度使わせてしまえば2度、3度と使われ、本島の他の港にも広がっていくとの危機感からでした。既存団体とも連絡を取りましたが、報道のあった14日は土曜で、16日（月・休）まで連休で各団体とも動きが鈍く、これまでも共に行動して来てきた、本部港の地元・本部町島ぐるみ会議と今回も行動を共にすることになりました。前もって本部港とその隣接する浜崎漁港の下見。本部港は伊江島に渡るときにいつも使っていますが、フェリー乗り場以外は不案内であり、貨物の部分も調べると意外と広い。10メートルのボートを降ろせそうな場所はどこかと調べると、3、4ヶ所あり、そこへとつながる港の出入り口を島ぐるみとあつまれで分担して阻止線を張ることになりました。

海兵隊を止める

17日は5時半過ぎから港で監視。港のゲートもまだ開いてない。集合時間の6時

には20人ほどが集まり、各所へ配置、少し先の道路にも監視を置きました。しばらくすると大型バス1台がやってきたので、観光客には早いな、と思って聞いてみると、なんと全港湾の組合員たちでした。やはり報道を見て「港は私たちの働く場所。米軍が使うことを絶対に許すわけにはいかない」と50人の屈強な港湾労働者たちが駆けつけてくれました。

7時前、監視メンバーから米軍車両が通過したとの連絡。隣の浜崎漁港に向かったと思ったら、大回りして本部港へやってきました。虚をつかれ本部港内に入られそうになったところをあつまれのメンバーが、間一髪で止めました。

あとは人数で勝る市民側が主導権を握りました。大型ボートを牽引してきた軍のトレーラーを市民が道路上で止め、港の入口は全港湾の組合員たちが封鎖しました。

沖縄地区港湾労働組合は10月24日にも自衛隊車両を摘んだ貨客船が事前協議をしないまま那覇軍港へ入港しようとしたとして、那覇港で集会を開き、事前協議の制度の遵守を求めた結果、同船は入港を保留せざるを得ませんでした。また同船は2月にも事前協議なしに中城湾港へ入港しましたが、その時には同組合はストライキを決行しました。

米軍撤退

浜崎漁港にいたメンバーや、各所に配置されていたメンバーも本部港ゲートに集

結し、次第に駆けつけてくれる市民の数も増えてきて、最大 60 人ほどになりました。何度か機動隊が隊列をなして出てきましたが、何もせずに戻っていきました。ゲート前は膠着状態が続き、いつものようにアピールや歌、トレーラー前をデモ行進したりして、ボートを止め続けました。

港の閉門は午後 5 時。今日も 5 時に閉まることを管理事務所職員に確認。4 時過ぎに事態が動き出しました。いつの間にか増員されていた機動隊員や防衛局職員など総勢 100 人を超える部隊がやってきました。ゲートは港湾労働者が固め、市民はその前の道路に座り込み二重の阻止線を張りました。しばし緊迫した状況が続きましたが、4 時半、防衛局は今日は港使用を中止することを告げました。それでも安心しない市民は座込みを続け、4 時 40 分にボートを牽引したトレーラーが引き返し始めると、皆勝利を確信し、「ボートを止めたぞ〜！」と歓声を上げました。その後、あつまれメンバーはボートを追跡。ボートがキャンプシュワブに入っていくことを確認しました。

民間港は使わせない

海兵隊は 21 日にも本部港を使用すると通告してましたが、断念しました。玉城デニー知事は「民間港湾は民間船舶の運輸を目的に設置されたもので、(米軍の)使用自粛を要請している」としました。これに対し河野防衛相は「こういう結果

になってしまうと、次から非常に(米側との)交渉はやりづらくなる」と述べました。河野大臣としては、自分が外相時代に、伊江島でのパラシュート降下訓練が悪天候などで「例外的に」嘉手納基地で行なわれていた訓練を伊江島で実施できるように米側に対応を求め、大型救助ボートが導入された経緯を主張しますが、デニー知事は「それと民間港湾使用は別問題」と反論、民間港を使用する理由にはならないとしました。

米海兵隊は、本部港を使わないとキャンプシュワブから一般道を使った、より移動距離の長い(米軍)嘉手納マリーナまで陸送することになるので、「地域への影響を念頭に置いて」本部港の利用を計画したといいますが、それなら交通量の少ない夜間に移動すれば済むことであり、米軍が本部港を使うのはその方が米軍にとって都合がいいからにすぎなく、米軍が訓練で使いたい場所で使うことでしかありません。

負担軽減の名のもとに

市民の抗議行動で港が使えなかったことに米軍は不快感を示している、と報道されました。米軍準機関紙「星条旗」は 1 ページの半分を使って報道、在日米大使館も国務省や国防総省に報告しました。1996 年の SACO 最終報告で沖縄の「負担軽減」策として読谷補助飛行場でのパラシュート降下訓練は伊江島に移して行なうことになりましたが、「天候不良」を口実に「例外」として嘉手納で実施する

降下訓練が増えていました。これへの反発対策として、海へ落ちてしまった兵隊を悪天候でも救助できるよう今回の大型救助ボートの導入が決められました。

日米地位協定第5条により米軍船舶が日本の民間港を使う権利があると米国防総省も日本政府も説明しますが、この第5条は使用料を減免することを定めた規定であり自由に使用できることを許す規定ではなく、拡大解釈だと学者は指摘します。

観光と物流の拠点

本部町には観光名所も多く、美ら海水族館には世界から年間400万人が訪れ、本部港は沖縄と九州を結ぶフェリーの寄港地でもあり、伊江島へのフェリーには修学旅行生も多く乗船し、釣り船、レジャー船も係留されています。沖縄北部観光の入口でもあり、物流の拠点でもあります。本部町民は「本部町は自然も美しく平和だ。軍事が持ち込まれるのは許せない」「負担軽減だと言うが、県民からすれば新たな拠点をつくる軍事増強だ」と懸念します。

新たな軍事拠点

また海兵隊はEABO(遠征前方基地作戦)と呼ばれる、離島での拠点づくりを目指す新たな作戦構想を画策しており、その訓練のために伊江島を「敵地」と見立てその上陸作戦を繰り返しています。この訓練のために最寄りの港である本部港を使いたい過ぎません。

米海兵隊は今回は使用を見送りましたが、報道によれば再び本部港の使用を検討しているとのこと。本部町島ぐるみ会議のメンバーは「何度でも追い返す」と強調しました。



【本部港で米軍ポート止める】

降下訓練を強行

河野防衛相が米軍に中止を求めるなか、嘉手納基地でパラシュート降下訓練が10月29日夜に強行され、河野大臣も、日米合意に反し、例外事由にあたらぬ、と異例の批判をしました。SACO合意後最多となる年4回目で、復帰後2回目の夜間降下訓練となります。この日は4回に分け20人以上の兵士が高度3千メートル上空から嘉手納基地に降下してきました。

嘉手納で実施した理由について在沖海兵隊は、伊江島は気象条件が悪く「救助艇が出せないため」としました。しかし同日の日中には伊江島での降下訓練は実施しており、それについては気象などの「条件が許容可能な数値だった」としました。伊江島での訓練では海兵隊兵士2人が基地フェンスから1.5キロほど離れている

伊江島空港の敷地内とその西側の民間の畑地に落下しました。フェンス外への落下は4月に続いて2回目です。伊江村議は「風が強かったため、訓練しないだろうと思っていた」と述べ、「あきれている。沖縄の声を無視している」と批判しました。

政府も県も訓練中止を求めましたが、米軍は「訓練は日米同盟に寄与する」とし、一方河野大臣は「日米同盟の維持強化に反する」と主張。SACO合意がすでに有名無実化しており、米軍の裁量次第で場所、時間を問わず訓練できる実態を示しているといえます。

伊江島では2日連続

「またか」10月29日に続き30日にもパラシュート降下訓練が行なわれ、今度は空軍兵1人がやはり伊江島空港敷地内に落下しました。連日提供区域外に落下するこの伊江島がそもそも訓練の「適地」と言えるのか、検証されなければなりません。

伊江島では18年に強襲揚陸艦の甲板を模した着陸帯「LHDデッキ」が完成し、最新鋭ステルス戦闘機F35Bの訓練も増え、騒音被害も激化、直前の18日には戦闘機部品落下も起きています。謝花副知事は「(米軍関係の問題が)あまりに多すぎて整理が追いつかない」と言うほどです。伊江島は観光の島であり、民泊で多くの修学旅行生も訪れます。影響が懸念されます。

5日間集中行動 完全勝利！

「あつまれ辺野古」では琉球セメント安和棧橋での連続阻止行動を10月21～25日まで実施し、一台のダンプも、ひと粒の土砂(赤土)も搬出させませんでした。大成功です。辺野古埋め立て用の土砂(赤土)はすべてこの安和棧橋と隣りの塩川港から搬出されます。塩川港からの搬出もありませんでした。完全勝利です。ただ、毎日集中行動をするわけにもいきません。それには人が足りません。是非、現地に足をお運びください。辺野古のことを広めてください。

———集中行動の詳しい報告は「あつまれ辺野古 活動報告 No. 4」を同封させていただきましたので、そちらをご覧ください。———



【集中行動、ダンプ止める】



【琉球セメントへ抗議】

【仮チラシ】非暴力トレーニングワークショップ

—意見の異なる相手との出会いに

非暴力精神をどのように生かせるか—

ファシリテーター：チャック・エッサー氏

東日本大震災によって露呈された原発エネルギー平和利用の虚構と核兵器開発へのからくり、脱原発に抵抗する経済優先社会、日本が世界へ誓った憲法9条「戦争放棄」改悪の危険性、住民を無視し続ける沖縄での米軍新基地建設と東アジア地域の安全論議など、私たちは、国内のいたるところで厳しい利害の対立と争いに立ち向かっています。

かつてわが国で初めて非暴力トレーニングを紹介・指導したチャック・エッサー（Chuck Esser）氏の来日を機に今日の対立を非暴力精神を生かしてどのように転換できるのか、ともに模索してみたいと思います。

非暴力トレーニングワークショップは講義によらず、参加型ワークで自分の暴力性に気付き、自己改革を通して社会変革を目指します。この機会に日頃の疑問や不安を分かち合い、自由に率直な意見交換を通して新たな道を見出しましょう。

場所：キリスト友会東京月会・会堂：東京都港区三田4-8-19、

地図：http://www.mognet.org/data/map_quaker.html

日時：2020年2月1日（土）10:00～16:00（予定）

会費：（未定）

主催：日本友和会、非暴力平和隊・日本

問合せ：090-3900-6894（飯高京子、日本友和会）

iitakakyoko2@gmail.com

080-6747-4157（大畑豊、非暴力平和隊・日本）

ohata-yu@r5.dion.ne.jp



Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本のウェブサイトの入会申込ページ**をご利用くださいますようお願いいたします。

◎ **正会員（議決権あり）**

- ・ 一般個人：10,000円
- ・ 学生個人：3000円

◎ **賛助会員（議決権なし）**

- ・ 一般個人：5000円（1口）
- ・ 学生個人：2000円（1口）

* 団体は正会員にはなれません。 ・ 団体 : 10,000円（1口）

■ **郵便振替**：00110-0-462182 加入者名：NPJ

* 通信欄に会員の種類を（賛助会員の場合は口数も）ご明記ください。

■ **銀行振込**：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを
通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ **ウェブサイトからのお申込み**：http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

チャック・エッサーさんの紹介

チャックさん（米国フィラデルフィア在住）が日本で最初に開催した非暴力トレーニングに阿木幸男・共同代表が参加、阿木さんはこれをきっかけに渡米して本格的にトレーニングを受け、日本で非暴力トレーニングを広め、『非暴力トレーニングの思想』『世界を変える非暴力』などの本を書くことになりました。

チャックさんは現在ではコウ・カウンセリング（ピア・カウンセリングとかエバリュエーション[再評価]カウンセリングとか言ったりしますが）ファシリテーターとして世界的に活躍していて、日本にも何度もカウンセリングワークショップのため来日されていて、今回はオーストラリアからの帰途、来日されます。

チャックさんの本：『世の中を変えて生きる 家庭・職場・ボランティアで、身近にできる社会変革の実践マニュアル』（チャールズ・エッサー他、嵯峨野書院）は米国での非暴力トレーニングの「古典」ともいえる Resource Manual for a Living Revolution（New Society Press）の翻訳です。

チャックさんはクエーカー教徒でもあります。クエーカーとは絶対非戦主義を抜くキリスト教の一派です。フレンド派（友会）と呼ばれたりもします。日本では新渡戸稲造などもクエーカー教徒でした。

会場の「キリスト友会東京月会・会堂」はクエーカーの（集会）施設です。

米国クエーカーが（中心となって）組織するアメリカ・フレンズ奉仕団はノーベル平和賞を受賞しており、頻りに来日し戦争の悲惨さと憲法9条の尊さを説いたベトナム帰還兵・元米国海兵隊員の故アレン・ネルソン氏もクエーカーでした。